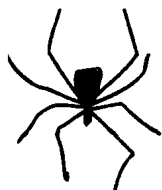
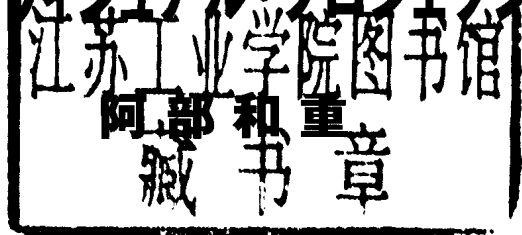


インディヴィジュアル・
プロジェクション

阿部和重

INDIVIDUAL
PROJECTION

インディガゼティアルプロジェクト



阿部和重

1968年、山形県に生まれる。

1990年、日本映画学校を卒業。

1994年、「アメリカの夜」で群像新人文学賞受賞。

著書に『アメリカの夜』『ABC戦争』

(いずれも講談社刊)がある。

インディヴィジュアル・プロジェクト

著 者……………^{あべかずしげ}阿部和重

発 行……………1997年5月30日

10 刷……………1998年1月30日

発行者……………佐藤隆信

発行所……………株式会社新潮社

郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71

電話 編集部(03)3266-5411

読者係(03)3266-5111

振替 00140-5-808

印刷所……………大日本印刷株式会社

製本所……………大口製本印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

© Kazushige Abe 1997, Printed in Japan

ISBN4-10-418001-7 C0095

インデヴィジュアル・プロジェクト

装
幀
常
盤
響

「戦いは最後の五分間である」

ナポレオン・ボナパルト

五月一五日（日）

33歳になったフリオは、「33歳」という歌をつくった。こんな歌だ。

「ノスタルジーとノスタルジーのあいだを／きみの人生とわたしの人生のあいだを／夜と暁のあいだを／日々が通り過ぎてゆく／だれでもよく覚えているあの年頃／16歳になったころ／あのころのわたしたちは／もっと大人になりたいと思っていた／だれでも／ほんの少しは／きのうという時を隠したがる／肌にかすかな／しわが見えはじめたとき／たった33歳／でも人生の半分／去って行く33年／こんなに急いで／求められればその人を／愛してきた33年／あなたと同じ33歳／他人には思いもよらぬこと」

ぼくはいま、この歌を聴いている。確かにまったく凡庸な歌詞だ。しかしぼくは気に入っている。フリオの歌はどれも素晴らしいものばかりだが、なかでもこの「33歳」には特に興奮させられる。歌詞の訳を読むまでもなく、ひどくセンチメンタルな曲で、囁くようなフリオの歌声とスペイン語の語感が刺激的だ。ぼくは偏頭痛もちなのだが、頭が痛いときにこの歌を聴いていると死にたくなるほどの刺激を受ける。偏頭痛もちではあるが、しかしぼくは不眠症ではない。眠ることはたやすい。ぼくはいつでもどこであっても眠ることができる。また、すぐに目覚めることもできる。頭痛は寝てしまえばすぐに治るし、薬など必要ではない。こうしたことは訓練をつづけてゆくうちに可能になった。父親も偏頭痛もちなので、遺伝なのかもしれないが、だとすればぼくの代でそれはほぼ克服された。訓練によって。

ぼくがフリオの歌を好んで聴くようになったのは、学生の頃につきあっていて彼女から誕生日のプレゼントとしてフリオのベスト・アルバムCDを貰ったことがきっかけだ。彼女は、「この歌手はあなたと同じ誕生日なのよ」といって、小さなポリエチレン製の手提げ袋に入ったCDをぼくにくれた。以来、ぼくは彼女と会うたびにフリオの歌を聴きながらセックスするようになり、それがほとんど習慣になった。その結果、ぼくの身体はフリオの歌を耳にすると条件反射的に昂揚し、勃起するようになってしまった。とりわけ「33歳」が聴こえようと、本能がじかに刺激されているような感覚すらおぼえる。卒業後すぐに彼女とは別れ

たが、数年経ったいまでも、フリオの歌に誘発されるぼくの身体反応は変わらず保たれている。それによって生じた欲求を解消するには、性的な処理か、暴力的な処理のいずれかしかない。こればかりは寝ても無駄なのだ。ぼくが目覚めれば、当然、ぼくの身体じたいも目覚めてしまう。

そういえば、「33歳」の歌詞には、一つ不吉な箇所がある。「だれでも／ほんの少しは／きのうという時を隠したがる／肌にかすかな／しわが見えはじめたとき」というところだ。ぼくはこの箇所を以下のように解釈した。「きのうという時」は、「肌にかすかな／しわが見えはじめた」者にとって抑圧的な効果となって回帰し、自身を束縛する。したがって、先へ進まねばならないにもかかわらず躊躇や迷いが生じた場合、「だれでも／ほんの少しは」、「否応なしにそれを「隠したがる」らざるを得ない。「きのうという時」の記憶が起こす反省は、なるほど好都合に作用することもあるれば、過剰な消極性をもたらすという欠点もある。あと数年たてば、ぼくも33歳を迎えるだろう。「きのうという時」は、いまやぼくにとっても、抑圧的な形を成して近づきつつあるのかもしれない。

五月一日（水）

仕事の休憩時間中に本屋へゆく途中、センター街を歩いていたら、プリティニシムラの前

で見知らぬ中年女に呼び止められた。商品広告に関するアンケートを行っているのだという。図書券をくれるというので承諾した。万葉会館内の一室へつれてゆかれ、年齢やら職業やら定期的に購読している雑誌名だとかを聞かれたあと、煙草のCFとポスターを数種類見せられてそれらの印象を述べろといわれた。すべてが平均的なイメージだとぼくは答えた。それだけかと訊ねられたが、それだけだと返した。すると相手がひどく残念そうな表情をするので、少し煽情的ではあるとつけ加えてやった。今度は満足したらしく、にこやかな顔で終了だと告げられた。こうして一〇〇〇円分の図書券が手に入った。

本屋から戻る途中、またセンター街を通ってみたら、別の中年女が通行人に声をかけようとしていた。さっきはほかにも数人仲間がいたのだが、今度は一人だった。こちらのほうが良い身なりに見える。もう一度図書券を貰おうと思い、その女のそばへ近寄ってみた。しかし彼女は調査員ではなかった。チラシ配りだ。これではもう一度図書券を貰うことはできない。彼女は、最初は誰かを呼び止めようとしていたかに見えたが、必ずしもそうではなかった。チラシを持ってただ突っ立っているだけなのだ。ぼくは自分から手を差し出してチラシを貰った。美容室の新装開店を示す宣伝チラシだった。ただしそれだけではなかった。その美容室は、「ピカドンの工業戦力」を備えているのだという。「ピカドンの工業戦力」とは、じつに厄介だ。ムラナカたちがあれを捜さずにいるはずはない。マサキはいつたいあのプラ

スチック・ボールをどこへ隠してしまったのだろうか？

五月二一日（土）

新聞には、今日も自殺者の記事が載っている。あいかわらずこの国では「自殺ブーム」が続いているようだ。そうかと思えば、死にたくもないのに殺されてしまう人々の記事も毎日載っている。なかでも猟奇趣味的な殺人事件の多さが目立つ。一月前ぼくが住む町内でも屍体愛好者だという男が逮捕されていた。その男にとっては屍体であれば男女どちらでも欲望充足の対象になり得るらしく、警察が彼の住居へ踏み込んだとき、男性屍体のペニスから切りとった亀頭部分と睾丸を、大きく膨らませた口のなかで飴玉のように転がしながら舐めていたのだと、近所のコンビニの店員が話していた。三つも丸いもんを口のなかに入れていたとは、随分欲張りなやつだと思いませんか？ まあどんな女でも眼のまえに出してやった途端むしゃぶりつくところを見ると、どうやらよっぽど美味いんでしょうね、こいつは、そういつて彼は自分の股間を指さしていた。この噂話が好きなアルバイト自身、じつは露骨な脚フェチ男なのだ。彼はそのことを隠さない。ぼくが買物にゆくたびに、その日に店を訪れた素晴らしい脚の持主について嬉しそうに語って聞かせる。彼はぼくもその種の趣味を何かもっているのではないかと疑っているので、最近は何かに凝っていると教えてやった。ともあれ、

新聞によれば犯罪件数や失業者数は依然として増加傾向にあり、はやくも今年は冷夏になりそうだという予想が出ていて、農民たちはすっかりやる気をなくしているという。政治家は外交でへまばかりやらかし、世界中から反感を買っている。たぶん、戦争になるだろう。スクリーンでは怪獣が暴れまわっている。まったく不穏なことだらけというわけだ。

五月二六日（木）

今日は馬鹿なことをやってしまった。アルバイトの一人であるヒラサワという男が、先週自分を袋叩きにした連中への報復にゆくというのでぼくは仕方なく同行した。彼は先週の金曜日の仕事帰りに井ノ頭通りからセンター街へ抜ける西武A館脇の小道を歩いていると、ゲームセンターから出てきた数人の高校生たちに突然からまれ、その場でさんざん痛めつけられたのだという。確かに、今週の月曜日に仕事場で会った彼は顔中に青痣をつくっていた。ヒラサワは今年地方から出てきたばかりの大学生だ。本人の話によると、高校生の頃の彼はそれなりに名が知られた「ヤンキー」で、地元ではけっこう幅を利かせていたのだという。だが実際は自慢できるほどのものではなく、むしろ小者にすぎなかったのだろうとぼくは思っている。そんな彼が、東京へ出てきてわずか数カ月のうちに複数とはいえ年下の高校生たちに虫けらのごとく扱われ、しかも現金約五万円とカード類が入った財布やローンを組んで

買ったばかりの507XXまで奪われてしまい、プライドを深く傷つけられて完全に頭にきていたわけだ。そして今日、最終上映スタート後、夕食の買出しに街へ出たときに例の高校生たちの一人が自分のGジャンを着てゲームセンターへ入ってゆくのを偶然目撃し、店内の様子を窺ったところ仲間の姿がなかったのだ、これは復讐のチャンスだと自分は思った、そのように彼はぼくに語ったのだった。

「どう思いますか？ オヌマさん。頭にきませんか？ 年下のガキどもに袋にされた挙句、財布とGジャンまでとられたんですよ。罰でも当たったんですかね、まったく。みつともなくて一昨日まで学校の連中と顔合わせられませんでしたよ。やっぱり礼は返しとくべきですよね？ 当然ですよね？」

それに対し、ぼくは答えた。

「まあ、やりたいようにやればいいさ。ただ、一度そういったことをやりだすときりがないし、少なくとも都内に住んでいる間は死ぬまでそれを続けざるを得なくなるかもしれないがね。これで終わるとは限らないからな。それに、途中で何が出てくるかわかったもんじゃない。そいつらは本当に制服着てたのか？ 地元には組関係の知合いが一人や二人いるのかもしれないが、ここじゃあおまえはただの学生にすぎないよ。月並みな言い方だが、将来東京湾の底に沈められなくなけりゃあおとなしくしているんだな」

ひとまず年長者らしく輕率さを窺^{たしな}めてやろうと思ひ、彼が背負い込むはずのリスクについて少しだけ大袈裟に述べてやった。しかし、というかむろん、血の氣が多く調子にのりやすいヒラサワには、そんな年長者の慎重論などまるで効果がない。

「高校生のガキ相手に泣き寝入りすることはないんじゃないですか、オヌマさん。おれはそういう事勿れ主義は好きじゃない。やることやつとかないと気持ち悪いし、なめられんのは腹立つし…… オヌマさんは違いますか？ あいつらのバックに何がいたって関係ないですよ、こっちもいちおう修羅場くぐってきてますからね。警戒ばかりしていちゃあ何もできませんよ」

この男、さつきから随分威勢のいいことばかりいっていやがるが、そんな話をおれに聞かせてどうするつもりだ？ ぼくはそのように思っていた。こいつはたぶん、復讐におれをつきあわせたいんだろう、相手がいまも一人とは限らんからな、そう、それでさつきから自分の怒りをおれに共有させようとしているような口調で話しかけていやがるわけだ、見え透いた手だな、訓練を積んだおれにそんな安易な手は通用しないぞ、ヒラサワよ…… けれども一方で、ぼくはこんなふうにも思っていた。とはいえ、久々に実戦するのもそう悪くない、演習にもなるし、この情況ならそれほど不自然ではない、ちよつと手助けする程度なら構わんだろう、相手が一人しかいなかったらヒラサワの戦闘ぶりを観戦してりゃあいい、なにし

ろ今日は出掛けにフリオの歌を聴いちゃったからな、刺激には刺激で、興奮を鎮めなくてはならないのだ……

仕事を終え、ぼくらは例のゲームセンターへむかった。今日はレイトショーがないので、ヒラサワが復讐相手の姿を見かけてからそれほど時間が経ってはおらず、まだその場にいると思われた。ぼくはヒラサワに、映写室からもってきた使用済みの単一形乾電池を二つ渡した。なんですか？ と彼が訊ね、わからないのか？ とぼくが聞くと頷くので、それを両手で握ってあれば殴ったときの威力が増すはずだと教えた。ヒラサワは、ああ、そういうこと、といった何かを思い出すような表情で納得していた。

公園通りを歩きながら、ぼくは中学生の頃のことを思い出していた。互いに相手の在籍校へ赴きおこなわれる不良学生どうしによる喧嘩。ぼくらはそうした紋切り型を飽きもせずにくり返していた。なぜかやらずにはいられなかった。それはいまも、到るところで、様々なかたちでくり返されている。格闘対戦型のコンピュータ・ゲーム・ソフトが売れているのは、誰もが暴力的な欲望を潜在的に抱いているからに違いない。これはいかにもありふれた見方だが、しかし暴力性に魅せられた人々が少なからずいることは確かだろう。ぼく自身、あの中学生時代から十数年が経過してもなお、いまだにこうして馬鹿げた紋切り型をくり返そうとしている。

やはり高校生の数は増えていた。といっても三人なので、問題ではない。制服を着ているのが二人と、ヒラサワから奪ったGジャンを着ているのが一人。ぼくが声をかけて外へ連れ出すと、ヒラサワの姿を見て彼らはすぐに何事か気づいた様子だった。両者ともさっそくその場でやりあおうという態度を示したので、ここで目立っては何かとまずいとぼくは思い、宮下公園に行こう、と誘った。五人で井ノ頭通りのほうへ歩きだそうとしたときに背後から呼び止められ、振り返ると、アービーズから出てきた高校生が一人、ハンバーガーとシェイクをもったまま敵に加わった。結局、二対四になったわけだ。とはいえむろん、何ら問題ではない。

しかしすぐに問題が生じた。山手線の高架線下を通りすぎた辺りで誰かの携帯電話が鳴りだした。高校生の一人が電話をかけてきた相手と話しはじめたので、ぼくは気になり、歩調を遅くしてその会話に耳を傾けた。相手は仲間の一人らしく、電話の持主は現在の状況や居場所や人数などを告げている。そして電話を切ると、すぐ来るってよ、と仲間たちに知らせた。どうやらほかにも何人か近くにいるようだ、面倒なことになりそうだな……。ぼくは手短にそのことをヒラサワに耳打ちし、事態が変わったのでつとりばやく済ますぞ、といった。さすがに彼も、先週すでに苦い経験をしているせいか、真面目な顔つきをして黙って頷いていた。そして公園へむかう階段をのぼりながら、ぼくはヒラサワに簡単な指示を与え

た。

「おい、さっきやった乾電池をこっちに一個よこせ」

彼は素直に渡した。

「いいか、おまえはとにかく一人に集中しろ、あとの三人は気にするな。そうだな、Gジャンのやつがいい、それ以外は構うな」

「オヌマさん、三人も平気ですか？」

「おれは四人でも平気だ。一分で片付けるぞ」

ヒラサワは信用せず、こんなときにそんな映画みたいなこといわないでくださいよ、といつて迷惑そうな顔をしていた。確かに少しかつこつけすぎたかもしれない、そう思いながらぼくは反省したが、しかし嘘をいったつもりはない。実際、本当に一分ほどで片がついた。ぼくはいまも鍛練を欠かしてはいなかったから、久々の実戦とはいえ、この程度の連中相手に挺摺^{とこず}るわけがなかった。そもそもこのような低レベルの相手にわずかも苦戦するようでは、塾生の頃に戻って一からやりなおさねばならず、苛酷な情況下で生き残るのはまず無理だと思わざるを得ないだろう。

「はやくこいよ、ほら」

高校生たちは、約二メートルほど離れたところで横にならんで立ち、こちらをむいていた。

彼らはみな上着を脱ごうともせずに突っ立っている。四人のうち三人が長髪で、しかも洗いつばなしの素髪状態であり、ちよつとでも動けば視界が遮られるだろう。全員がA JⅪを履いている。こいつらはバスケのチームか？ だとすれば一人たりないが。ズボンの腰穿きをおおさぬところを見ると、なめているのか何も考えていないかのどちらかだが、いずれにせよそれはこちらにとって好都合だ。

「上等だこのガキ！」

ヒラサワがそう怒鳴り、高校生たちが彼のほうへ視線をむけたのを見て、ぼくは右手にもった乾電池を左端にいる一人の顔面におもいきり投げつけた。そしてすぐにその隣にいるもう一人の正面にすばやく近づいて顎へ掌底を打ち込み、さらにもう一人、ハンバーガーは食べ終えたもののいまだにシェイクを飲みつづけているやつ、脇腹へ蹴りをいれた。こいつはシェイクを飲んでいるためちようど右脇腹があいていたのだ。その結果、シェイクの残りはそいつの顔や胸に飛び散った。今日はアイリッシュセッターをやめてナイロンコルテツを履いてきたのは正解だった。足が軽く、攻撃しやすい。効率良く、それぞれ一発ずつで動きを止めることができた。ここまでは予定通りうまくいったわけだ。顔面に乾電池の直撃をくらったやつは、不意にやられたショックと激痛で立ち上がれず、ほぼ戦闘不能の状態だった。あとはほかの二人へ決定打を与えれば自分の担当は終了し、ヒラサワを援護するだけのはず